

どんなオフィスが生産性を上げるのか

数年前から日本でも一部企業が導入するようになった、社員が毎日座る席を自由に選べる「フリーアドレス制」。先進企業が次々と採用しているイメージのためか、経営者の中には「フリーアドレスにすれば生産性が高まる」と考えている人もいる。

だが、オフィスと働き方の変革を手掛けているパーソルファシリティマネジメントの植井紀之社長によれば、ことはそう単純ではない。「フリーアドレスの

目的は無駄な空席をなくすこと。生産性は、それだけでは必ずしも向上しない」

ならば、どんなオフィスが生産性を上げるのか。植井社長が強調するのは、オフィスを「協働の場」として磨いていくことだ。自宅やカフェなど多様な場で働く時代だからこそ、ブレンストーミングやプレゼンテーションなど、人が集まる仕事の生産性を第一に考

えてオフィスを作るべきだという。

それを実現するのがアクティビティ・ベースド・ワーキング(ABW)と呼ばれる考え方だ。効率化のため100人に80の席で対応するのが単純なフリーアドレス制だとすれば、むしろ100人に120席分の多様なスペースを与えるのがABWのアプローチだと植井社長は言う。余剰があることで目的に合わせて場所を選べるよ

うになり、外部から人を招いて協働しやすくなる。投資対効果の分母であるコストの削減ではなく、分子である生産性の最大化を目指したオフィス変革だ。「オフィスを改善して協働が活発になることで質のいい成果が出る。成果が出れば、その結果としてやる気も出る。生産性向上は人事制度などソフト面が目立ちがちだが、ハード面であるオフィスにも凄い力

があるので知ってほしい」
(植井社長)



パーソルファシリティマネジメントの植井紀之社長(上)。ABWの考え方で作ったオフィス事例(左)

ことだ。「例えば、人間は視界の10~15%を緑が占めると知的生産性が最も高まる」と岩月隆一副社長は説明する。

視界の15%を緑化する

同じ観葉植物でも、ストレスを減らす植物と逆に増やす植物も特定している。ストレス削減に効果的なのは、シュガーバイン、グレープアイビーなどのつる性の植物や、エバーフレッシュのように曲がりくねった植物。「“f分の1ゆらぎ”的ごとく波打った見た目がリラックスにつながると分析している」と岩月副社長は話す。実際、竹やサボ

テンなど“直線的”な植物は、ストレス増加につながるという。

コモレビズはこうした知見を総動員し、どの席からでも視界に占める緑の比率が10~15%になるよう計算してオフィスを設計。ストレス削減に効果があるといわれるハイレゾリューションの環境音やアロマも組み合わせる。

コモレビズ導入の第1号企業は、眼鏡ブランド大手のジンズだ。17年12月に設けた会員制ワークスペース「Think Lab」で、緑化とハイレゾ音を活用し働く者の集中力を高める新しいオフィスを模索している。イメージは禅寺。

効果は今のところ鮮明で、この部屋で作業する人が感じるストレスを数値化した「ストレス値」は、一般的なオフィスでの数値から約4分の3にまで下がった。今後は、アロマによるリラックス効果も含め実験を続けるという。

最新技術の導入が必要な「感情分析」や「チーム構成の最適化」に比べ「医学の知恵の活用」の場合、実践企業の取り組み自体は、出社制度の工夫からオフィス緑化までいずれもアナログ的だ。理論は難しくても、ある意味、やろうと思えばどこの企業にも挑戦できる仕組みと言えそうだ。